

## 明応(今切決壊)以前の浜名湖南部の地形

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加茂, 豊策 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024984">https://doi.org/10.14945/00024984</a>

# 明応(今切決壊)以前の浜名湖南部の地形

加 茂 豊 策

本稿は2005年度静岡県地学会研究奨励金交付の1次報告書である。

## 1. はじめに

ほぼ30年前浜名湖周辺は、伊場遺跡・弁天島海底遺跡・新居沖湖底遺跡が報告され、古代ブームであった。

弁天島海底遺跡実質調査では、『浜名湖弁天島海底遺跡発掘調査概報』(舞阪町教育委員会, 1972)とは別に『弁天海辺は季節的漁村だった』(市原, 1975)という報告書をまとめた。そのなかで、遺跡は加藤(1957)がいう第3または第4砂堤の西端に位置し、その西側には海が広がっていたと推論した。伊場遺跡実質調査関係者らは、弁天島海底遺跡から発掘された木杵と浜名湖南部の湖底から発見された土器片を資料として古代の浜名湖を推定し、浜名湖等深線図(国土地理院1:10,000湖沼図, 浜名湖3, 4)を基にして古代浜名湖図を三つ描いた。そのうち向坂(1976)と浜松市教育委員会(1976)では古人見沖に存在する8m程の深みを南に流れる川とした。また、嶋・向坂(1976)では、村櫛南の6m程の深みを西に流れる川とした。そしてこれらの川は弥生・奈良時代の河川で、川以外の浜名湖南部一帯は「久しく陸地で、縄文時代には森林地帯、弥生時代は水田のひらけた土地柄であった」と説明した。しかし、向坂(1976)らが弥生・奈良時代の川跡とした古人見・村櫛沖の深みは昭和23~26年に国の先行事業で行われた干拓の際、揚土式サンドポンプで掘られた浚渫跡である

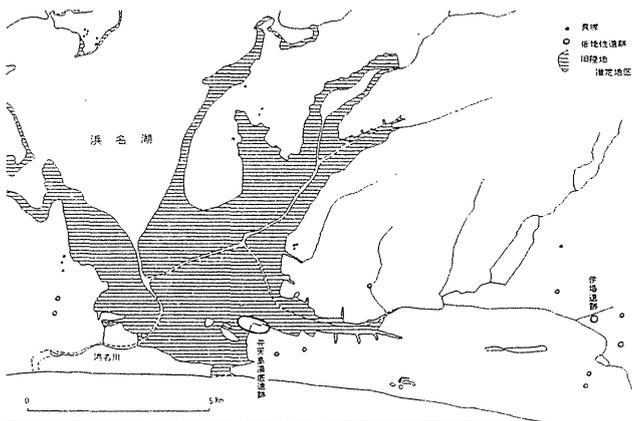


図1. 浜松市教育委員会(1976)による古代浜名湖の誤った復元図。浜松市教育委員会の許可を得て転載。

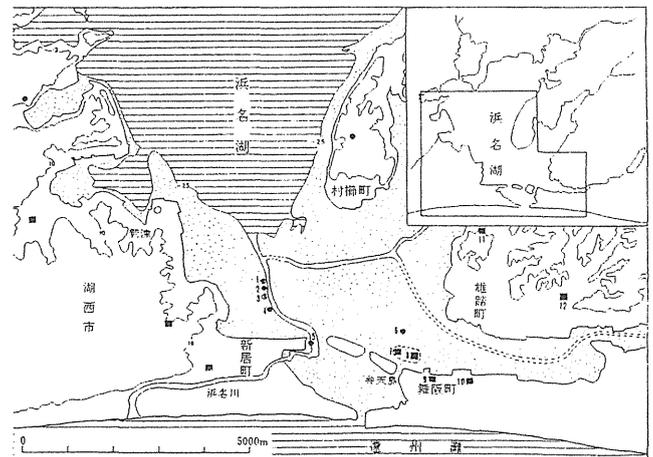


図2. 嶋・向坂(1976)による古代浜名湖の誤った復元図。ニューサイエンス社の許可を得て「考古学ジャーナル」より転載。

(静岡県土地改良史編さん委員会, 1999)。また、それより下流については、向坂 (1976) と浜松市教育委員会 (1976) では浅瀬を横切った空想上の川を創作しており、嶋・向坂 (1976) では明応大地変後形成し始め、明治時代東海道 (現 JR) 新設に伴う埋め立てで固定化した流路 (ミヨ) を川としている。また、半年ほどの間に描かれた三つの図がそれぞれ異なっている。これらの図の著者のひとり向坂に私信で質したところ (2005.4), 指摘されるまで干拓事業, 雄踏・篠原区域塩濱の事実を認識しておらず、『嶋・向坂 (1976) を描いたとき, 浚渫によるものと思って, 浜松市教育委員会 (1976) のように改めた』という回答が返ってきた。前者は10月に, 後者は同年3月に公表されたものである。したがって, 向坂 (1976), 浜松市教育委員会 (1976), 嶋・向坂 (1976) で示された三つの古代浜名湖はいずれも地史には関係なく, 誤った図と断定せざるをえない (図1, 2)。

## 2. 浜名湖南部陸地説の否定

(1) 弁天島海底遺跡から発掘された木杵について：舞阪町教育委員会 (1972) は井戸杵としているが, その可能性は極めて低い。木杵は3個発掘されたが, その距離間隔は10 m, 45 m である。古代の集落で3箇所井戸がこんな近距離にあったとは考えにくい。また高さ・長径ともに114 cm 程度の木杵を全域砂層地に据えて, 飲料水に適する地下水が湧水することなどあり得ない。湖畔に住する農漁民の感覚では, もし当地が砂嘴の西端の砂浜であったとすれば海水が湧水し, 森林地帯であったならばボウフラが生息する水溜まりにしかならない。湖辺の農民は編んだ竹製井筒を田に据え, 苗代用井戸を掘削していたからである。内部の砂を掘り出し, 竹筒を少しずつ沈めていく。砂地では井筒を使用しない限り深く掘り進めることは不可能である。遺跡の木杵の下には掘られた形跡は報告されていない。また『木杵の中に壺型土器 (土師器) が出土したため, 7世紀代の井戸であることが明らかになった』としているが飲み水用の木杵の中に土器が遺棄されているのは不自然である。この木杵は井戸杵ではなく他の用途の可能性が高い。舞阪町郷土資料館には出土した用途不明の木片が保存されている。ほぼ30 cm 間隔に1.7×2.2 cm 程の孔が3箇所開けられた腐食小木片である。この小木片は組み立て式海藻乾燥装置の部品ではなかったか。乾燥オゴノリなどの海藻を木杵の中で洗い, 付着塩分を溶かす。木杵は海水濃縮装置ではなかったか。

(2) 三ヶ日町宇利山川流域で発掘された貝化石：1995年, 三ヶ日町宇利山川流域の水田地下から発掘された二枚貝の化石が浜松市教育事務所三ヶ日分室に保存されている。サルボウ, コタマガイなど汽水・海水域の貝化石である (図3)。図で分かるようにサルボウ化石は泥土に包まれている。発掘場所が猪鼻湖への流入河川であるから, 南部に位置する浜名湖が古代閉じた淡水湖であった可能性は極めて低い。

(3) 雄踏・篠原の塩濱の成立：寛文5年 (1665) の村櫛村と宇布見村の藻草争論裁許絵図には山崎・宇布見塩濱, 篠原塩濱が描かれている (加茂, 2001)。天正16年 (1588) 領家方 (現宇布見)・山崎又二郎塩年貢請取の記録がある (静岡県, 1996)。山崎・宇布見及び篠原地先での塩濱はそれ以前から存在していた可能性が極めて高い。浜名湖南部一帯が陸地であったとすれば, この区域に塩濱としての必須条件である等粒状粗砂の砂浜の存在などあり得ず, 塩濱は成立しない, 現在でもこの区域の表土は等粒状砂質である。



図3. 三ヶ日町で発掘された二枚貝化石 (三ヶ日分室所蔵).

(4) 新居町の塩濱：大日本帝国市町村地図刊行会 (1937) の『新居町土地寶典』には高師山丘陵東端源太山の北東，新居関所南付近の地籍名が「瀬先」・「洲崎」・「塩濱」と記されている (図4)。古天龍川から流出し，海岸流で西に運搬され，高師山丘陵にさえぎられ，堆積した砂地である。江戸期，新居に関所が開設されてからは，この地は宿場区域である。だから明応今切決壊以前，湖口が帯ノ湊に開いていた時代，この区域が海 (湖) 岸の砂浜・干潟であったことを物語っている。



図4. 新居町新居地籍図.

(5) 浜名湖南部の浅瀬の造成年代：都司ら (1998) は浜名湖南部の湖底堆積物中の津波痕跡調査を行った。そのとき津波痕跡が認められた2ヶ所のコアサンプルを年代測定した (図5)。測点6では，深さ50 cm で760±50BP，測点8では，深さ10 cm で590±60BP，30 cm で820±60BPとしている。測点は新幹線鉄橋の北1.5 km までの地点である。都司らは砂礫などのサンプルは津波で海岸から運ばれたとしているが，大部分の堆積物は沿岸漂砂として東から運搬され，堆積した砂礫である。どちらにしても堆積年代が桁数で3桁である。水深1 mの湖底堆積物の測定年代であるので，古

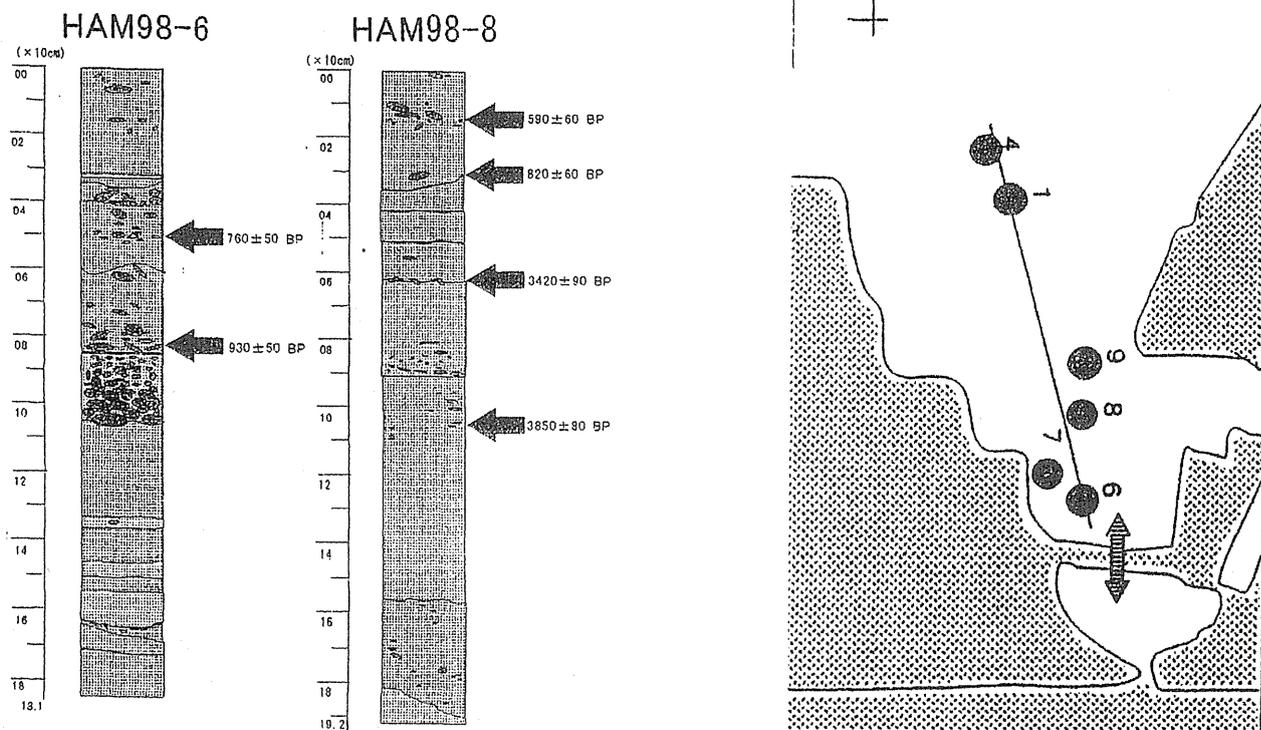


図5. 都司ら(1988)によるコアサンプル中の堆積年代(左)とその測点(右)。歴史地震研究会の許可を得て「歴史地震」より転載。

代この付近の海域が全体的に陸地であった可能性はない。測点地点は新居町沖湖底遺跡にほぼ一致する。

(6) 浜名湖南部一帯は海であった：前述したように、「縄文時代には森林地帯であったり、弥生時代には水田がひらけた土地柄であった」としたり、昭和20年代に浚渫した深みが弥生・奈良時代の川跡であったとした浜名湖南部陸地説は成り立たない。市原(1975)が『約5キロ程の広い湾口が内湾に直接続いていたはずである』としたように浜名湖南部一帯は海であったのである。

### 3. 海岸砂丘造成のメカニズム

(1) 沿岸漂砂運搬のメカニズム：天龍川河口より西側の遠州灘では、黒潮の影響で、沿岸流は西向きの流れが卓越している。また遠浅海岸であるため、汀近くでは特有の海岸流が生じる。離岸流と向岸流である。この両流は組になり、ほぼ環状の流れを形成し、モデル的には隣の流れと対称的になる。対になった環状の流れは一般的に200~500 mの間隔で、連続して汀線の沖合に生じる。しかし、西向きの沿岸流の影響で、向岸流は岸に垂直に向かうのではなく、北西の向きに汀線に打ち寄せる。離岸流は沖合に垂直に向かうのではなく、南西方向に傾いて流れる(図6)。漂砂は向岸流によって汀線に打ち上げられ、離岸流によって沖合に流れ出る。結果的に漂砂は向岸流と離岸流のもつ運動エネルギーによりジグザグに、汀線に沿って西に運搬される。汀線陸側の海浜には波濤と風の相互作用によりバームが、汀線の沖合には地元民が一番瀬・二番瀬と呼ぶバーが形成する(図7)。バーは加藤(1957)が『海岸前面に平行な浅瀬が存在し、新居側では特に顕著であると報告されている』とした

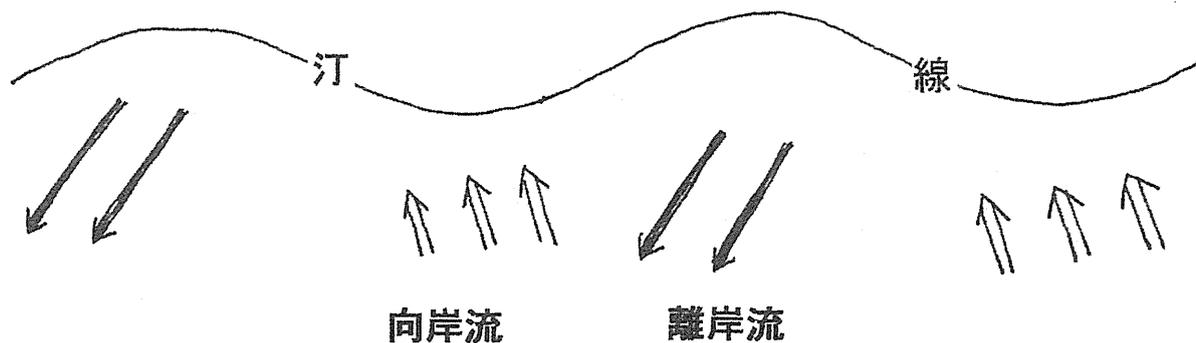


図6. 海岸流のモデル (上) と実態 (下).

地形である。海上に出れば砂洲である。干満による潮位の変動と、海岸流と風の強弱により、バーとバームは複雑に変化しながら縮小・成長を繰り返す（現在天龍川からの流出砂礫の激減によりバーもバームも規模が小さくなっている）。バーとバームは隆起とか海水準の低下などには関係なく、向岸流と海風が卓越する場合陸地化する。そして汀線が南に押し出される。

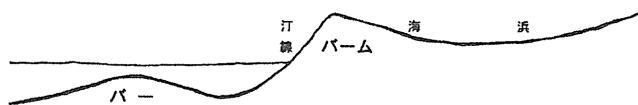


図7. 海浜の実態.

(2) 陸地化したバームとバー：浜松市南部の砂堤列平野では若林・増楽・高塚区域の砂丘は陸地化した巨大バームである。加藤（1957）が『北下りの傾動を伴った隆起運動』とした地形である。それより西の篠原・坪井馬郡・舞阪区域は巨大バーが陸地化したものと考えられる。江戸期篠原と坪井の

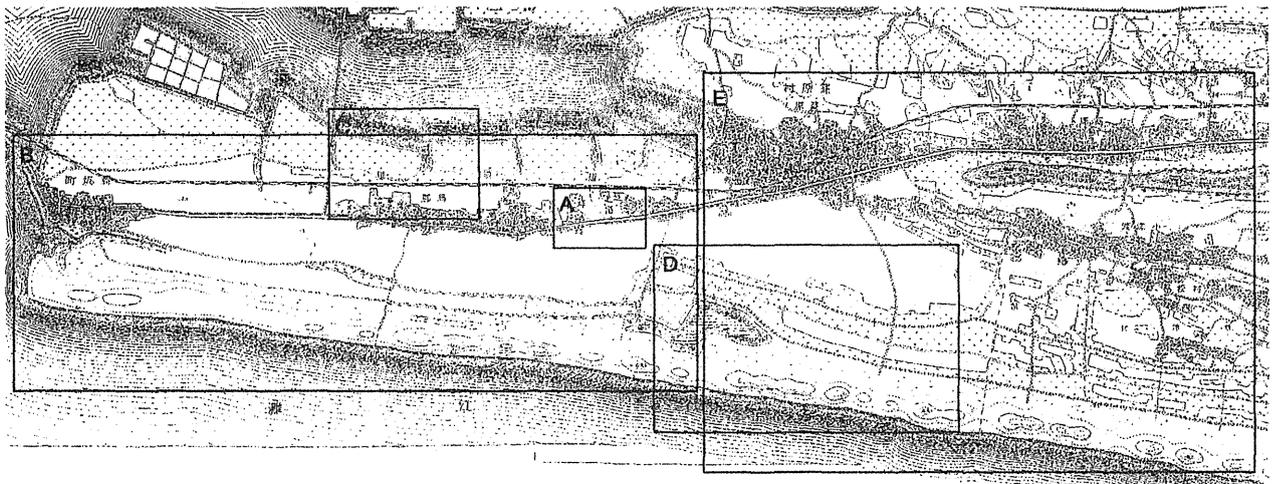
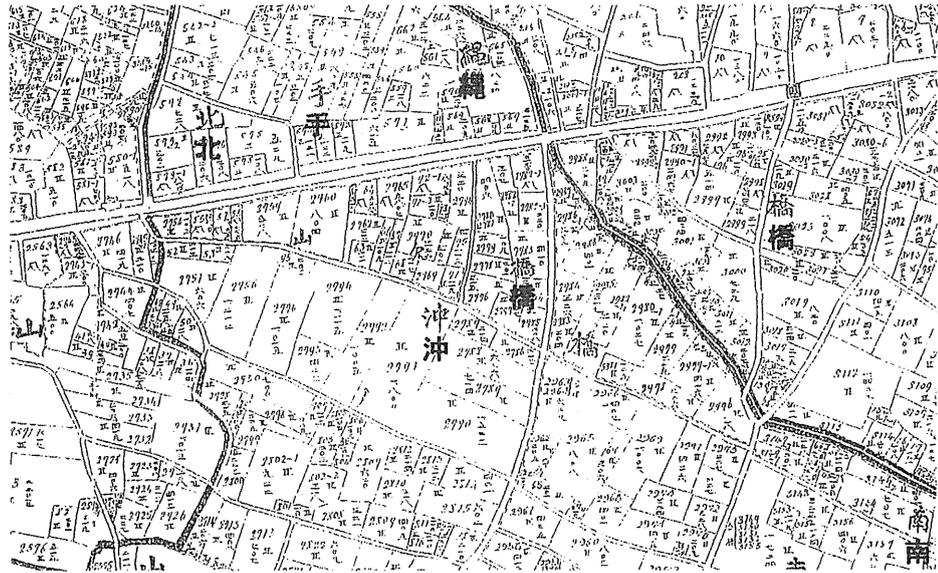


図8. 坪井付近の地籍図（上図）. 下の図（浜名湖東辺地形図，明治23年測図）のAの部分  
 部分を拡大したもの.

境に土橋があった。東海道分間延絵図に「字新田土橋」とある橋である。帝国市町村明細地図刊行会（1933）には土橋の南に「橋沖」・「橋南」、北に「縄手北」という地籍名が記されている（図8）。また馬郡と舞阪の境にも縄手があった。松並木になっている西部分には江戸期西長池川に渡された舞坂土橋があり、東端には現在でも東長池川の水路跡が認められる（図9）。どちらも陸地化したバーとバーとの間の砂洲間低地である。舞阪町は象島という島であったという伝承がある。古代，ある期間陸地化した砂洲が四つ，東西一列に並んで浮かんでいたことになる。砂洲は東西に長く，南北幅は狭く，広い区域でも数百メートルであった（図10）。

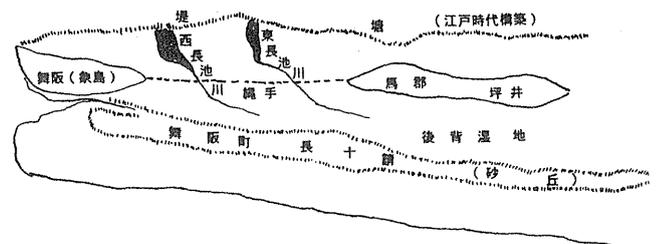


図9. 舞阪町区域の地形. 図8下図のBの部分  
 を拡大したもの. 地形図には西長池川が描かれていない. 両長池は新幹線建設の際区画整理された. 坪井・馬郡・象島が古来の基本砂洲である. 南北幅は極めて狭い.

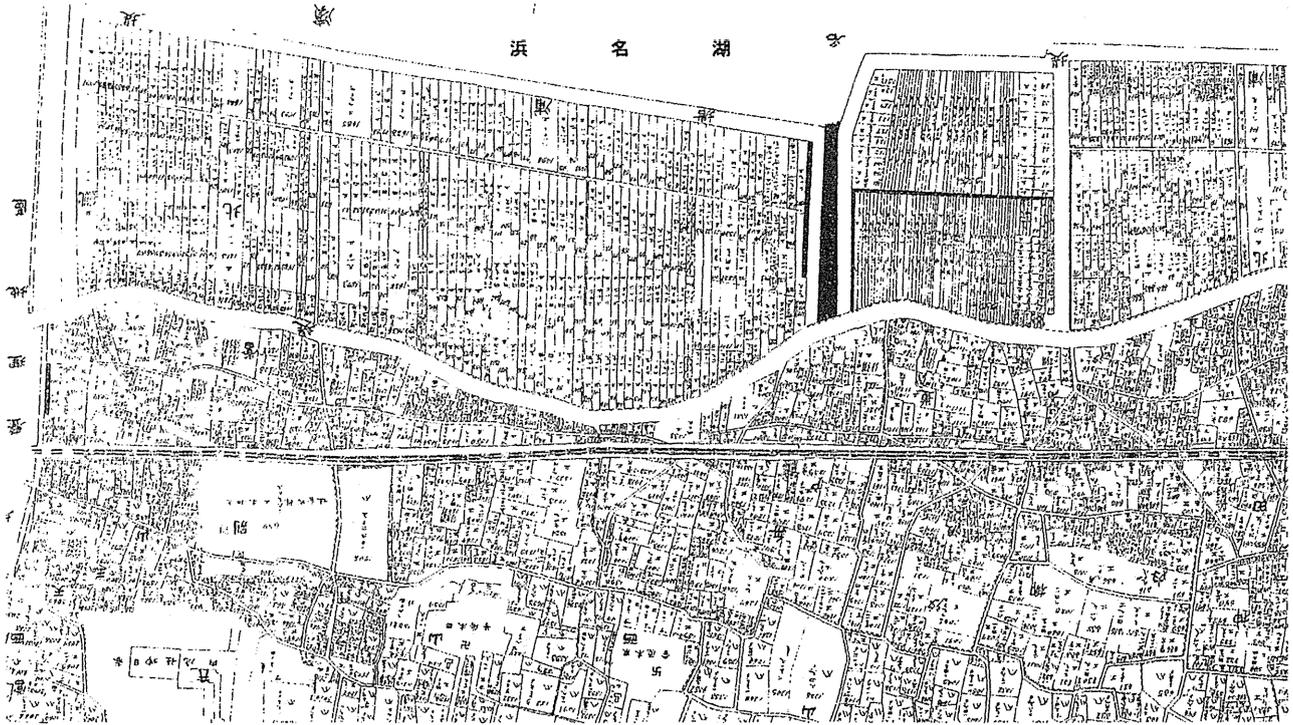


図10. 馬郡付近の地籍図。図8下図のCの部分拡大したもの。堤塘の北側は地籍割が整然とし、新開である。堤塘は古来の土地保全のため江戸期に構築された。砂丘の南北側は極めて狭かった。

#### 4. 古代浜名湖南部の地形

加茂 (2003) が論じた鹿玉河 (第1古天竜川) から715年以前流出し、三方原台地南崖 (志都呂地区など) に堆積し、さらに西に運ばれて造成した千塚山、雄踏小学校・白山神社の砂丘、その南雄踏図書館の砂丘、その南浅羽部落の砂丘、さらにその西に存在した曾祢、堂島などの砂浜は浜名湾東側に存在した古代の砂丘や砂洲、または干潟と推定される。

陸地化した可美・篠原・坪井馬郡・舞阪などの四つの砂洲の延長上にイカリ瀬・八兵衛瀬 (現在干潟)、向島・元荒井 (江戸期に在、以後陸地) などの干潟があった。

また、象島 (舞阪) の北側には篠原飛地 (塩濱)、その直ぐ西に弁天島海底遺跡がある。どちらも中洲というより干潟であった可能性が極めて高い。それは篠原飛地が明治23年測量の地形図では干潟の塩濱であり、昭和8年の土地寶典では池沼になっているからである。また弁天島海底遺跡は現在潮間帯の干潟である。低潮位の春先ならば海藻を活用した海水濃縮作業は可能である。新居町沖湖底遺跡はこのラインの西方にある。湖底遺跡付近も干潟または中洲であった可能性が高い。舞阪から新居橋本まで南北幅の狭い砂洲が伸びる以前、715年以前の古天竜川 (鹿玉河を含む) と東に流路を変えた第2古天竜川 (荒玉河) からの流出砂礫が河口に近い東側では連続した砂丘を造成し、西にいくに従い、不連続に砂丘・中洲や干潟、浅瀬を



図11. 古代浜名湖南部の地形。弁天島・新居両遺跡が季節的に活用された時代の想像図。

形成した。両遺跡成立時代の浜名湖南部は浅い海が広がり、湾口の東側と西側に砂洲や干潟が点在していた（図11）。

### 5. 浜名湖の形成

(1) 小型潟湖の形成：第2古天竜川（荒玉河）からの流出砂礫で可美村砂丘が造成された。その後流路の東進で汀線が南進した。新しく造成された新津村砂丘の陸側に潟湖ができた。潟湖は後背湿地となり、「蓮池」と呼ばれ、1950年代まで池沼として存在していた。



図12. 篠原南部の地籍図。図8下図のDの部分拡大したもの。第一堤塘の南側を中新田・村請・濱表と、潟湖に堤塘を築き開発した。池沼であった長浜浦は活用度が低いため地籍面積が広い。

帝国市町村明細地図刊行会（1933）に「長浜浦」という地籍名が記されている。新津村境付近から西に、舞阪町地境まで達する海浜の陸側に、長浜浦はあった。江戸期にはこの浦に東西に長い堤塘を築き、その陸側を開田した古文書が残されている。堤塘は4列認められる（図12）。東方の新津村地先の海浜から西に伸びたバームが砂堤を

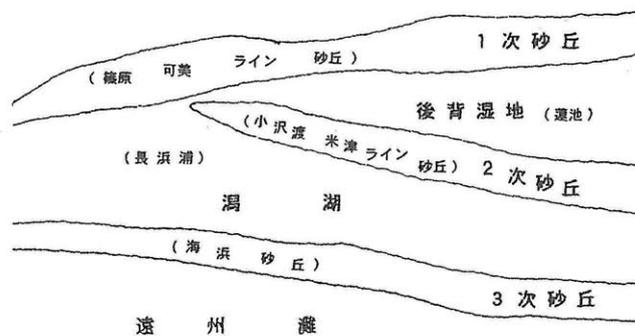


図13. 小型潟湖形成過程推定図。図8下図のEの部分拡大したもの。

形成し、その内側に東西に長い潟湖が生じたことを物語っている。後背湿地にならない潟湖時代の開田である。長浜浦という地籍名のある西端区域が、明治23年測図の地形図では広大な湖沼になっている。この潟湖を形成した砂堤は江戸初期に造成されたことになる(図13)。

(2) 浜名湖の形成：第2古天竜川(荒玉河)からの流出砂礫の堆積で造成された可美・篠原・坪井馬郡・舞阪の砂洲延長上やや南側に、砂礫が堆積して生じた南北幅の狭い砂洲が浜名湾の湾口に立ちはだかるように西に伸びた。そして新居橋本を越えた西方では不連続な砂洲を形成した。巨大潟湖の誕生である。浜名湖は北部は海跡湖であるが、南部はその成因や形状から明らかに潟湖である。

承和10年(843)猪鼻駅家の再興、嘉祥3年(850)の角避比古神の格付け、仁寿3年(853)の郵船増の申請、貞観4年(862)年の浜名橋修造などの記録から、舞阪側から新居側に伸び、不連続だった砂洲が、840年代には連続した伸びきった砂堤になったと考えられる。これにより、浜名湖南回りの東海道が開け、新居橋本が宿場として賑わうことになる。

## 6. 明応以前の浜名湖口帯ノ湊

(1) 帯ノ湊の位置と変遷：明応以前の浜名湖口・帯ノ湊が文徳実録嘉祥3年(850)の条に、大略次

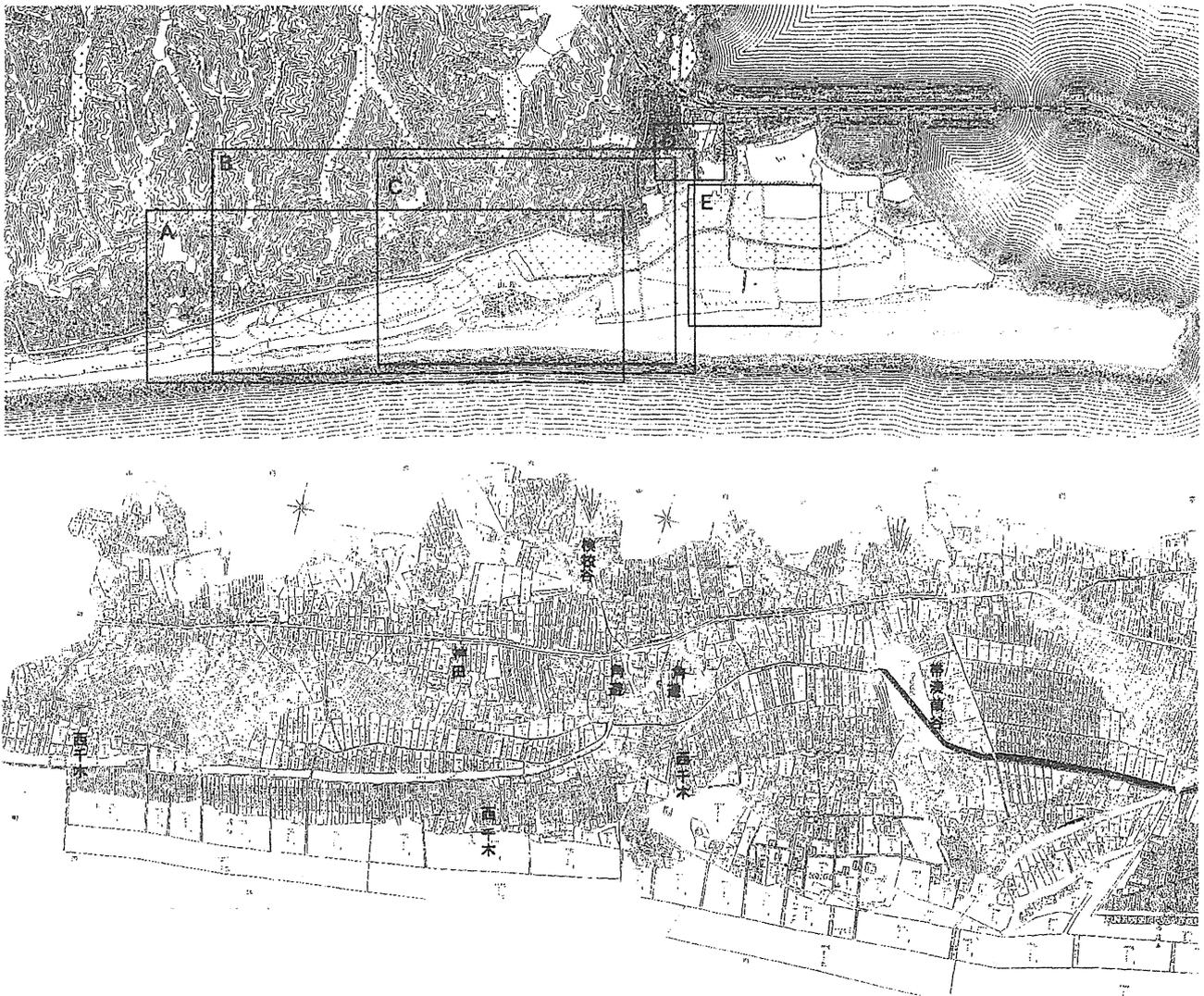


図14. 浜名湖西辺地形図(明治23年測図)(上)と新居町浜名区域地籍図。図中A.

のような記述で登場する。「角避比古神は大湖を見下ろす場所にある。湖には一口あり、開いたり塞いだりして、同じ状態であることはない」。大日本帝国市町村地図刊行会（1937）(7)大字浜名には角避比古神の存在を示す「角避」・「神田」という地籍名が高師山丘陵海蝕崖南下に隣り合って存在する。その東には「帯湊葭谷」という地籍名がある。地元で「西川」と呼ばれ、国道建設が行われるまで池沼であった。また南の沿岸低地には「西千木」という地籍名が東西に3ヶ所離れて並んでいる（図14）。西千木とは西のセギ、セギは水が流れ落ちる場所を表す。当時の湊が帯ノ浜であったことを地籍名は伝えている。800年代、舞阪側から伸びてきた砂洲が新居橋本南西付近では不連続な浅瀬になっていて、東西に長いセギ状湖口になっていた。そのため帯ノ湊と呼ばれた（図15）。

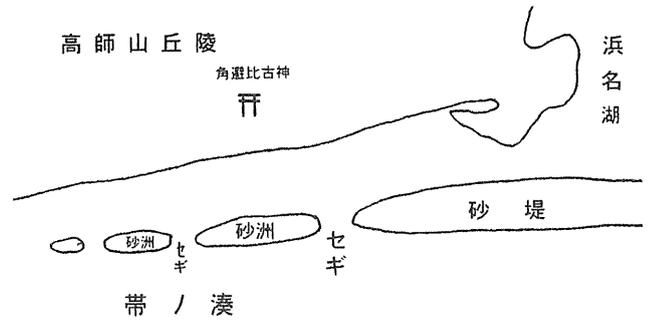


図15. 850年頃の浜名湖口帯ノ湊。図14上図のB。

東からの沿岸漂砂の堆積量が増せばセギ状湖口が塞がり、台風などで飛ばされれば開いた。文徳実録の『開塞無常』の地史的解釈である。

(2) 安定した帯ノ湊：嘉祥3年（850）の名神大の格付け申請以来、角避比古神は「角避」・「神田」の地籍名だけを残して歴史から消えた。「角避」の北側高師山丘陵海蝕崖に「検校谷」という地籍名がある。海蝕崖の崩落で神社が埋まり、加えて帯ノ湊が安定した湖口になったためであろう。

波濤と浜名湖からの交流水により砂洲の一部が決壊し、湖口となり、さらに浸蝕され、帯ノ湊という名称には似つかぬ煙管状の湖口として安定したためである。波濤が打ち寄せた砂洲が「若磯」、薪を運んだ海域の岸辺が「杣川」という地名になっている（図16）。

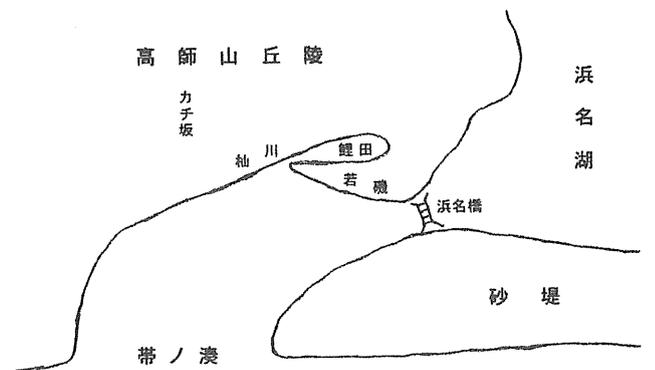


図16. 安定した帯ノ湊（平安・鎌倉時代）。図14上図のC。

以後、明応（1498）の今切決壊まで、浜名湖南部の地形は変化しなかった。帯ノ湊の周辺、湾口を塞いだ砂洲などに松を植樹し、地形の保全に努めたためである。

(3) 旅行文学者の記述：新居町役場（1960）に明応難以前の東海道の道標であったカチ坂の記述がある。カチ坂は帯ノ湊の北側の高師山海蝕崖を垂直に登った猪鼻坂である。平安・鎌倉時代東下りした旅人が初めて海を見た地点である。

海道記（1223）には『この山の腰を南に下りて、遙かに見下せば、青海浪々として、白雲沈沈たり。海上の眺望は此処に勝れたり・范蠡扁舟の泊・塩屋には薄き煙靡然としてなびきて・浜礫には搜尋る潮涓焉とたまりて、数条の畝碱々たり』（抜粋）。1223年にはカチ坂（猪鼻坂）からの、果てしなく広がる海の眺めが素晴らしかったこと、小舟が浮かぶ帯ノ湊が眼下にあり、その一角に塩濱があったことが分かる。藤原為家は坂上の休息地で『高師山夕越へはてて休らえば麓の浜に藻塩焼く見ゆ』（1224）と詠じて帯ノ湊の景状を裏付けている。為氏（1222-1286）は同じ場所で『猶しばし見てこ

そゆかめ高師山麓にめぐる浦の松原』、中務卿御子は浜名橋から帯ノ湊を眺めて『浜名川湊はるかに見渡せば松原めぐる海士の釣り船』と詠じている。両歌から帯ノ湊の浜辺が植樹した松で保全されていたことを推察できる。阿仏尼は同じ風景を「浦風荒れて、松の響すごく、波いと荒らし」と前置きして、『わがためや風も高師の浜ならむ袖のみなどの波はやすまで』と擬人法で詠じている (1279)。1279年には杣川・若磯辺りの松は大木になっていたと推定できる。

### 7. 平安・鎌倉時代の浜名湖南部の地形

(1) 平安・鎌倉時代の浜名湖南部の地形：2。  
 (4)で取り上げたように新居町源太山北東住宅地に「瀬先」・「洲崎」・「塩濱」などの地籍名が残っている (図4)。だから明応今切決壊以前この付近より東方は浦だったことになる。新居町土地寶典(2)大字新居には「渡場」、大字内山には「北渡場」という地籍名がある (図17)。渡場は舞阪から伸びた砂堤上にあった。北渡場は江戸時代「元荒井」と呼ばれた中洲にあった。また江戸時代には南の砂堤と「元荒井」との間に、東西に長く存在した浦を前川と呼称した古絵図が残っている。明応今切決壊以前には「元荒井」の西端に位置する「渡場」付近が中洲となっていて、それより東

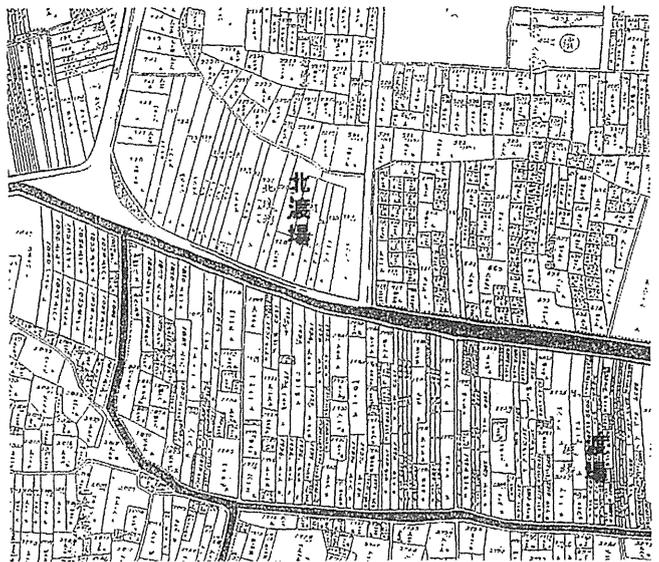


図17. 新居町新居地籍図。図14上図のE。

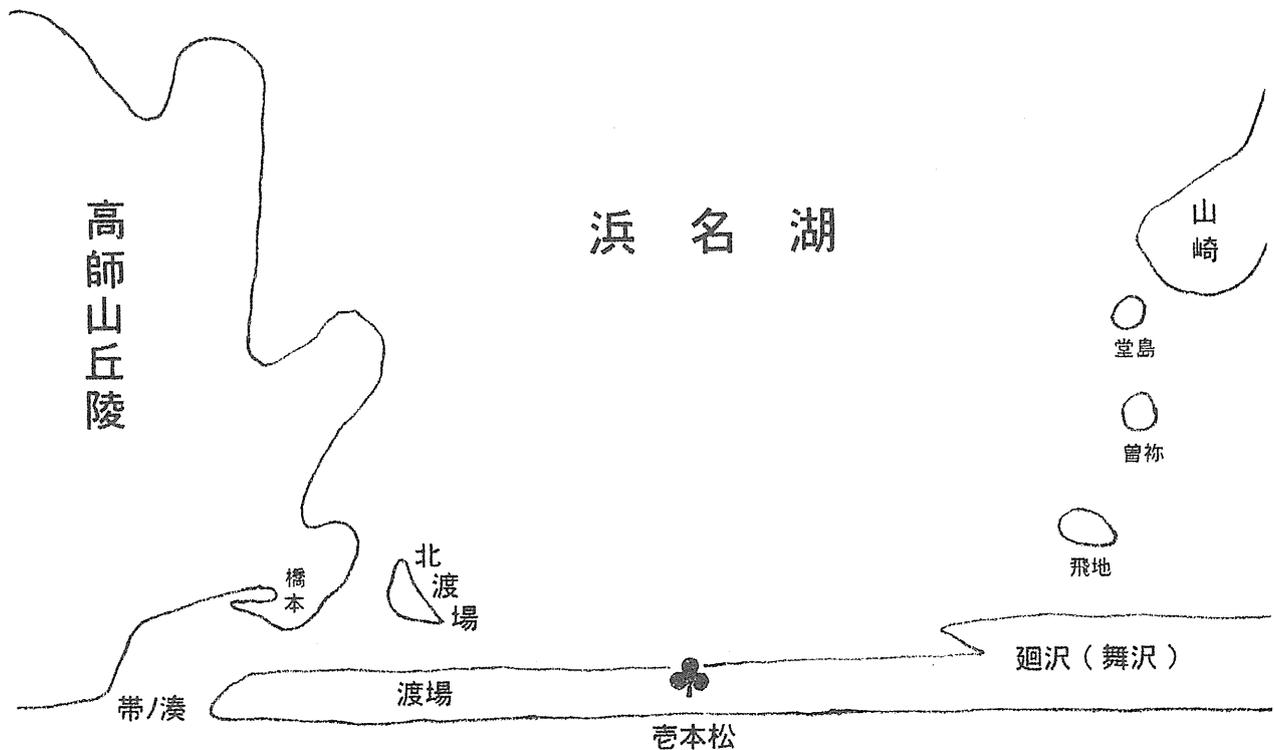


図18. 平安・鎌倉時代の浜名湖南部の地形。

の「元荒井」の大部分、八兵衛瀬、イカリ瀬などは干潟ではなく、浅瀬であった可能性が高い（イカリとは水に活っているという古語）。

平安・鎌倉時代、舞阪側から新居橋本南西の湖口・帯ノ湊まで砂堤が伸び、遠州灘と浜名湖が隔てられていた。浜名湖南部西海域では「北渡場」付近が中洲になっていた。東海域には篠原飛地（塩濱）、宇布見曾祢（塩濱）、山崎堂島（塩濱）などの干潟か中洲が島状に存在したのではなかったか。そして中央海域は広々した浅い浦が広がっていたと推定している（図18）。

(2) 旅行文学者の記述：平安時代の歌人、能因（988-）は、「はまなのはしをはじめて見て、けふみればはまなのはしをおとにのみききわたりけることぞくやしき、はまなのはしのわたりへ行とて、さすらふる身はいづくともなかりけりはまなのはしのわたりへぞ行く」と嘆詠している。浜名橋がないときには渡船を利用したこと、架橋地点から渡場まで歩いたことを詠歌にして伝えている。東下りでは浜名湖奥からの水路を、橋本側から船で渡り、北渡場という中洲を中継し、また前川を船で渡り、砂堤（駅路）の渡場に上陸するといった順序であったことが詠歌と地籍名から推定できる。

舞阪側から帯ノ湊まで伸びていた砂堤について、法眼慶融は『たかし山越へ来て見れば浜松の一筋とほき浦の入海』、飛鳥井雅経卿（1170-1221）は『誰うえて海と川とをへたつらん浪を分けたる松の村立』と詠じている。前者は具体的ではないが、後者は「大波の外海と小波の浜名湖を砂堤が隔てている。砂堤には誰が植えたのか、松が繁っている」と、浜名湖内の状況は定かではないが、松林が砂堤を守っていた様子を伝えている。海道記（1223）には砂堤の北側に広がる浜名湖について、「北を顧みれば、湖上遙かに浮かんで、波の皺、水の兒に老いたり」と記されている。北方に広々とした浜名湖が広がり、波は老人の顔の皺のように細かく穏やかであると説明している。源平盛衰記巻45では「北は湖水茫々として、人屋岸に列なれり」と記している。東関紀行（1242）では「南に海湖あり、漁舟波に浮かぶ。北には湖水あり、人家岸に連なれり。その間に洲崎遠くさし出でて、松きびしく生ひつづき」と記述している。湖口・帯ノ湊に釣船が浮かび、北には浜名湖があり、松が植えられている砂洲が東に伸びきっているという内容である。海道記には「浜松の浦に来たりぬ…林の風におくられて、廻沢の宿を過ぎ」とある。壺本松の根元に1665年設置された庄境石が、新居弁天道路脇に石碑として建立されている。新居弁天より東が浜松だったのである。浜名湖東側も浦と呼ぶにふさわしい浜松の浦が広がっていたことになる。東関紀行には「舞沢の原といふ所に来にけり。西は海の渚に近し」とある。舞阪は原のような砂洲であり、西方に浜松の浦が広がっていたとして、海道記の記述を裏付けている。海道記には「万株松しげくして」とある。この記述で、砂堤の松林の状況が次のように推察される。庄境の壺本松だけは高く、他は小松が隙間無く植えられ、砂堤を保全していた。世界遺産に登録されたバルト海のクルシュー砂州のように、地元民が松の植樹で駅路を保全していた。

(3) 淡水湖の時代はなかった：濱名橋は湖口帯ノ湊と浜名湖の間の水路に架けられていた。平兼盛は「潮みてるほどに行きかふ旅人や浜なのはしと名つけ初めけん」（983）、為家は「風渡る濱名の橋の夕しほにさされてのぼる海士のつり船」（1248）と詠じ、海道記では同じ場所で「橋の下にさしのぼる潮は、帰らぬ水をかへしてかみざまにながれ」と入潮を表現している。阿仏尼（-1283）はうたたねの記で「おほきなる河のどかに流れたり。海いと近ければ。湊のなみこゝもとにきこえて。塩のさすときはこの河の水さかさまに流るゝやうに見ゆるなど」と、帯ノ湊の状況と入潮を表現している

(次田, 1978). 瀧湖であった浜名湖が平安鎌倉時代淡水湖でなく汽水湖であったことを裏付けている。

(4) 明応今切決壊の主因：浜名湖付近の記述は覧富士記 (1432) を最後に見当たらない。以後1498年までの浜名湖は不明である。前面の砂堤が小松で保全されていたため、浜名湖南部は明応の大地変まで平安・鎌倉時代の地形を保っていたと考えるべきである。

明応地震では浜名湖南部一帯は、地盤の沈降はなかったのである。その根拠は、浜名橋が架橋されていた、新居橋本付近の地形が平安・鎌倉時代そのまま残っていて、旅行者が記した当時の風景を的確に説明できるからである。宗長日記には「山崎よりいなさ細江をこがせ」(1522) とある (島津, 1975)。仮に今切が沈降で生じたとすれば、沈降現象は湖南部一帯に及んでいたはずであり、山崎の湖岸から東湖岸伝いに都筑まで連歌師が渡船できたなど考えられない (明応今切決壊前後、浜名湖の地形は変わったことはない)。

宗長日記には「一とせのたかしほよりあら海おそろしきわたりすとて…此わたりまで、善四郎為清打をくり」(1526) とある。先年の高潮により駈路 (砂洲) が決壊し、為清に庄境舞阪の浜辺まで見送られ、宗長は「此度の旅行まで」と記すほどの荒海を渡船した。79才であった。「たかしほ」から今切が津波 (高潮) で決壊したこと、「おそろしきわたりす」から渡船航路に波濤が碎けるほど決壊幅が広がったことを伝えている。

砂堤が津浪で決壊したのは、ほぼ600年もの長い間保全活動が続いていたが、足利幕府の政情不安が地方に及び砂堤が放置されたこと、あいまって津浪が大規模であったと結論せざるを得ない。

## 8. 誤った復元図の引用

本稿で否定した浜名湖南部陸地説の『伊場木簡図』(浜松市教育委員会, 1976) や『新居郷図』(向坂, 1976) が新居町 (1985, 1989), 浜松市博物館 (2004), 財団法人浜松市教育会館 (2003) などに引用され、色づけされて、浜松地方の歴史観に悪影響を与えている。

新居町 (1989) では古代浜名湖図に『伊場木簡図』がそのまま引用され、浜名湖周辺の古代交通路や浜名湖周辺の荘園・御厨分布、南北朝時代の浜名湖周辺、戦国時代の小領主などにまで引用され、修正加筆されている。新居町 (1985) では弥生時代の推定海岸線に『新居郷図』が引用されている。

浜松市博物館 (2004) では、古代の東海道と天竜川平野の条里 (推定図)・浜松地域の荘園に引用され、修正加筆されている。

財団法人浜松市教育会館 (2003) では縄文時代の遺跡分布図、弥生時代の遺跡分布、古墳時代の遺跡分布図、奈良・平安 (律令) 時代の遺跡分布図と交通路推定図、荘園の分布図、南北朝時代の遠江に引用され、修正加筆されている。

地質・地形・地史学への見識の問題からか誤った復元であると考えずに引用したためであり、論じられている内容は誤った復元図を基にしているためすべて不適當である。特に浜松市博物館 (2004) では大幅に修正加筆され、不適切さが拡大されている。財団法人浜松市教育会館 (2003) では平成7年度からこれらの誤った復元図が引用されているが、義務教育で使用される副教材としては内容が極めて不適切であり、間違った歴史観が培われる危惧が大である。

## 引用文献

- 新居町役場（1960）：新居町史，史料編1，新居町，213p.
- 新居町（1989）：新居町史第1巻．通史編上，新居町，993p.
- 新居町（1985）：新居町史第3巻．風土編，新居町，953p.
- 大日本帝国市町村地図刊行会（1937）：新居町土地寶典．
- 浜松市博物館（2004）：図説浜松の歴史．浜松市博物館，102p.
- 浜松市教育委員会（1976）：伊場木簡．伊場遺跡発掘調査報告書第1冊．浜松市教育委員会，31p.
- 市原寿文（1975）：弁天海辺は季節的漁村だった．歴史読本，20(15)，50-65.
- 加茂豊策（2001）：濱名の渡りと鎌倉への道．自費出版，200p.
- 加茂豊策（2003）：天龍川の変遷と浜松市南部の沿岸低地造成の関係について．静岡地学，88，21-28.
- 加藤芳郎（1957）：蜷塚遺跡付近の地形地質について．蜷塚遺跡第1次発掘調査報告，72-89.
- 舞阪町教育委員会（1972）：浜名湖弁天島海底遺跡発掘調査概報，舞阪町教育委員会，70p.
- 向坂鋼二（1976）：古代の浜名湖．新居郷，6，3-7.
- 嶋 竹秋・向坂鋼二（1976）：浜名湖新居町沖湖底遺跡調査予報．考古学ジャーナル，128，18-22.
- 島津忠夫校注（1975）：宗長日記．岩波文庫，204p.
- 静岡県（1996）：静岡県史資料編8，中世4，静岡県，1120p.
- 静岡県土地改良史編さん委員会（1999）：静岡県土地改良史．静岡県，1173p.
- 帝国市町村明細地図刊行会（1933）：篠原村土地寶典．
- 次田香澄全訳注（1978）：うたたね．講談社，156p.
- 都司嘉宣・岡村 眞・松岡裕美・村上嘉謙（1998）：浜名湖の湖底堆積物中の津波痕跡調査．歴史地震，14，101-113.
- 財団法人浜松市教育会館（2003）：のびゆく浜松，浜松市教育会館，204p.